

微小粒子状物質（PM2.5）の発生源寄与率の推定結果（令和5年度）

令和5年度の成分分析調査結果から、発生源の寄与率を推定する手法のひとつであるCMB法による解析を実施しました。

その結果、夏季は有機炭素及び硫酸アンモニウム、冬季は硝酸アンモニウムの寄与割合が大きく、年平均は有機炭素の寄与割合が最も大きい結果となりました。

有機炭素は、発生源から直接排出される一次生成粒子のほかに、揮発性有機化合物（VOC）が大気中での光化学反応などにより凝縮して粒子化するもの（二次生成粒子）もあることから、特に夏季に濃度が高くなったと考えられます。

なお、硫酸アンモニウムは、硫黄酸化物とアンモニアが気温の高い時に活発になる光化学反応により生成されるため夏季に寄与率が高くなり、硝酸アンモニウムは、温度が上がるとガス状であるが、低温時には主に粒子状となるため冬季に寄与率が高くなる傾向があります。

微小粒子状物質（PM2.5）発生源の寄与率の推定結果（令和5年度）

